

縁あって下関西高校へ入学した君たちへ、今日で高校生として過ごす時間1095日のうち約400日が過ぎ、授業日数で考えると約580日のうちの200日が経過したことになります。君たちには残りの時間が意外と少ないということに是非、気づいて欲しいと思いますし、自分自身で与えられた時間と空間をしっかりと管理できる高校生になってください。進路指導部では今年も全校向けの「進路だより」に加え、2学年向けに進路通信「**To be or not to be**」を発刊することにしました。ここでは大学入学共通テスト関係の情報はもちろん、進路指導全般に関わることを発信していく予定です。昨年同様メッセージ性の強い進路通信にしたいと思いますのでどうぞよろしく願いいたします。また、進路通信のタイトルについてですが、去年は『*Noblesse Oblige*』でした。これは「才能ある地位ある者が果たすべき社会的責任や義務を人のために果たそうと行動する良き市民たれ！」という意味で、多くの諸先輩方が社会で活躍されているのに続き、本校の輝かしい伝統と歴史の継承者として大きな志を抱き、高い理想や目標を掲げ、仲間と共に切磋琢磨していただきとお願いしましたが、1年間、君たち一人一人、大きな成果をあげることができましたか？

ところで、今年のタイトルですが『*To be or not to be*』にしました。これについては、このフレーズの後に「**that is the question.**」を続けると、「**To be, or not to be, that is the question.**」となりますが、これを見て、シェイクスピアの『ハムレット』の有名なセリフだと気づく人もいるのではないかと思います。この日本語訳にはいくつかあるようですが、現在のところ、多くの人に認知されているものとしては「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」ではないでしょうか。ただし、「復讐をはたすべきか、やめるべきか」など他にも色々な訳が発表されているようです。私は東京大学の小田島雄志先生が訳された「このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ」という訳に注目し、「**君たちはやるのか、やらないのか？」「今のままでいいのか？」**というメッセージを贈ろうと思い、進路通信のタイトルにしました。承知のように、君たち高校2年生**共通の敵**はずばり「**中だるみ!**」です。だから、中だるみをせずに受験に向かう姿勢や構えを早く作ることが重要になってきます。もちろん、受験だけでなく、部活動などの特別活動や校外活動でも成果をあげようと思えば、中だるみは禁物です。どうぞ、授業や部活動、生徒会活動、地域貢献、ボランティア活動、読書などの様々な場面においてタイムマネジメント力を発揮し、昨年以上に充実した1年間になるようお願いしてください。私も微力ながら全力でのサポートを約束します。

ところで、君たちは以前、話題になった**マルクス・ガブリエル**という人物を知っていますか？彼はドイツのボン大学教授で、哲学界のロックスターと呼ばれる新進気鋭の哲学者です。彼は新型コロナ後の世界について興味深い主張をしています。それはアフターコロナにおいて「人類が新型コロナ前の世界に戻ることは、絶対に期待してはいけないということです。彼によれば、戦後の世界の開発速度があまりに早すぎた結果、人間同士の競争で地球を破壊したのでコロナ前の世界は否定されるべきだと考え、2020年のパンデミックは自然が「今のようなことを続けるな」と最後の呼びかけをしたのだと主張しています。さらに、コロナ禍で大金を稼いだ人にパンデミックで苦しんでいる人や国に分け与えるような価値観をもたせるべきで、これを「倫理資本主義」と名づけています。そして、環境問題や貧困など世界的な問題は、グローバル経済が過度に利益を追求し過ぎた結果が原因なので、これからは増えた富は適切な倫理観に基づき再配分するべきであり、これこそが完璧なインフラとなるのだと述べています。私もコロナ禍になった直後にマルクス・ガブリエルのテレビ番組を視聴しました。その番組は多様な「世界」があふれている社会がそれぞれのルールで自己完結的な理屈が交わり、それぞれが信じる正義で、  
(裏面につづく)

ネット上を使い誹謗中傷が繰り返されていることに違和感を持った、彼が自分の世界に閉じこもろうとする人たちに待ったをかける内容になっていました。なぜ、私がマイケル・ガブリエルを紹介したかと言うと、西高生も昨年度の入試で多くの生徒が小論文に苦戦していました。小論文の中心テーマは社会問題ですが、本番では各教科の授業で獲得した知識理解力、思考力や表現力などが必要です。現在のトレンドは「グローバル化」「A I」「格差社会」「少子高齢社会」「監視社会」「リスク」などですが、これらのテーマはそれぞれ独立しているものではなく相互に関連しているので生徒には**メタ認知**の力が必要になってきます。しかも、「A I」に関する出題も基本的な内容は格差社会との関係についてですが、最近では**哲学やリスクを問う**問題も増加していますし、自分の世界に閉じこもって社会から目を背けていては小論文で高い評価を得ることは難しいです。だから、そのことも踏まえて各教科の学習に真摯に取り組んでください。以前、九州大学の共創学部がA Iに関する出題をしましたが、これについて今回、少しだけ紹介します。

この試験は資料が5つ提示され、問1、問2の設問に答えるものでした。※資料は省略します。

問1 厚生労働省の「保健医療分野におけるA I活用推進懇談会」は「A Iの実用化が比較的早いと考えられる領域」として、ゲノム医療、画像診断支援、診断・治療支援、医薬品開発、「A Iの実用化に向けて段階的に取り組むべきと考えられる領域」として、介護・認知症、手術支援、合計6領域をA I開発を進めるべき重点領域と位置づけられている。これらのうち、介護・認知症の領域でA Iを実用化しようとする場合に、想定される諸課題をあげ、それがなぜ問題となるのか分析したうえで、解決方法についてあなたの考えを述べなさい。

問2 A Iの研究開発と利用が今後急速に発展し、A Iシステムが国境を越えて人間及び社会に広範かつ多大な影響を及ぼすと見込まれることから、**A Iの研究開発や利用に対し倫理規定を設けようとする活動が世界的に始まっている**。A I開発に関するガイドラインを定める必要性について、あなたの考えを述べなさい。

もちろん、問題の解答作成においては資料読解がメインとなりますが、同時にインプットされた内容をもとに受験生の考えも出題者にフィードバックするのが条件です。解答する時は「**問いの本質=出題者のメッセージ**」、そして資料に提示されている**違和感**を正確に理解し、脳内にある知識を言い換えなどの再構成をしながら解答用紙にアウトプットしていく作業が必要です。だから、君たちの脳内にテーマに関する知識がある程度、必要になってきます。この時、注意して欲しいのは大学側が君たちに要求しているのは**ネットを利用しての情報収集力ではなく教科学習からの知識理解力**だということであり、この学力は、当然ですが、授業で獲得するものだという点です。マルクス・ガブリエルの言説に戻りますが、今回、私が伝えたいことは、**知識の必要性を感じ、物事を深く考える習慣をつきなさい**ということです。コミュニケーションツールとして期待を集めたデジタルメディアこそが社会を壊しているとガブリエルは指摘していますが。彼は倫理の授業で出てくるカント、ヘーゲルと関連づけてその本質を明らかにしており、まさに授業における学びと社会との関連づけが重要だということです。公共の授業でも登場する哲学者のカントが考えた「自由意志」という概念、その先にある「目的の王国」などドイツ哲学の本流に君たちが真正面から積極的にアクセスしてくれることを期待しています。では、最後をお願いします。

## 凡事徹底

- (1) 遅刻をしない
- (2) 挨拶をする
- (3) 授業に集中する
- (4) 掃除をする
- (5) 学校行事に積極的に参加する
- (6) 部活動・特別活動をやり遂げる

当たり前のことが  
当たり前にできる人でなければ  
難しいことはできない！！

以上、よろしく申し上げます。

(文責・進路指導部 松村)